
子犬のワルツ

長月 夕子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子犬のワルツ

【Nコード】

N3353E

【作者名】

長月 夕子

【あらすじ】

思ったより雪は積もるようだ。子犬のワルツにのせて。

思ったより雪は積もるようだ。

人気の無くなつた廊下を歩きながら、3階の窓から見える校庭に雪が付されていくのを見ていた。大方の生徒は下校したようだが、数人の男子が歓声を上げて校庭を走っている。

私は音楽室のドアの前に立つ。掃除当番がいるはずだけれど期待はしない。こんな雪の日はサボるよね、私だって早く帰りたいもの。ふれるだけで凍りそうに冷たいドアへ手をかけた。

「なんだ、先生か」

グランドピアノの蓋の向こうから、白い鶏冠頭が顔を出した。髪が白くなるほど脱色し、逆立てているのは戸川君。

「他の当番は？」

「誰も来ないよ、俺だってもう帰るし」

私は聞こえるように溜息をつく。気持ちはわかるがここは怒っていることにする。

「それで、あなたは何をしているの？掃除もしないで」

そう問うと、いきなりピアノの音が音楽室に響いた。耳慣れたその曲はシヨパンの短いワルツ。戸川君の髪が子犬のように揺れる。窓の外を降りしきる、雪の速さに良くあっていた。指輪を幾つもはめた無骨な戸川君の手を思い浮かべる。授業中はいつだって枕の替わりになっているその手が、こんなに繊細な音を奏でる。

曲が終わると、余韻も残さず彼はさっさと立ち上がる。ピアノは蓋を閉められ、見慣れた置物に姿を変える。

「戸川君ってピアノ弾けるのね、びっくりした」

私の横をすり抜けて、音楽室を出ようとする背に声をかける。

「音大狙ってるの？」

アクササリーをジャラジャラいわせて、彼は振り向いた。

「この程度じゃどうか、専門行って調律師とかなら考えてるけ

ど」

意外にすっかりとした考えを持っていることに驚く。進路は早く決めたほうが良いに越したことはない。先の見通しは大切だ。漠然と大学へ行つて、それで立ちすくむ友人を多く見てきた。私だってそう。なんとなくここに立っている自分。彼が立っている、そこには5年の歳月がある。

でも、たかだか5年前の話じゃないか。17歳。

「無責任なようだけど、やれるとこまでやってみてもいいと思うよ、ピアノのことはよくわからないけど、戸川君のピアノはとてもうまいと思うし」

そう言つと、踵を返し、私との間合いをつめてじつとこちらを覗き込むように視線を合わせた。

「あきらめてるわけじゃないから」

答える彼の唇は思っていたよりずっと大人びている。

どさりと、窓から見える杉の木の、枝に積もった重そうな雪が音をたてて落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3353e/>

子犬のワルツ

2010年11月20日02時49分発行